

The Japanese Association for Metastasis Research

NEWSLETTER Vol. 62

理事長挨拶 土岐 祐一郎
第33回会長挨拶／学術集会のご案内
第32回会長挨拶／学術集会を終えて
第32回 総会報告
寄稿 入村 達郎 名誉会員
第27回 研究奨励賞受賞報告 中山 淳
(国立がん研究センター研究所)
第1回女性研究者がん転移研究グラント賞
間石 奈湖(北海道大学大学院歯学研究院)
研究奨励賞募集案内
女性研究者がん転移研究グラント賞募集案内
新評議員申請案内
会則/役員選任規程/役員名簿/変更届



日本がん転移学会

URL : <http://jamr.umin.ac.jp>

理事長挨拶

この度日本がん転移学会の理事長を拝命しました。本学会はこれまで理事長を置かず、毎年ごとに交代する会長を中心に3年ごとに交代する理事がサポートするという形態で運営されてきました。実際は大阪府立成人病センター（現大阪国際がんセンター）の研究所で、明渡均先生、伊藤和幸先生、井上正宏先生が中心となって事務局運営をしていただいていたので安定した学会運営ができておりました。井上先生が異動されてからは、消化器外科の大植雅之先生が事務局を引きついでくださっておりますが、大植先生は大阪国際がんセンター病院長に就任されてご多忙となっております。このような状況の中で中期的なビジョンに基づいた運営が必要ではないかという意見がだされ、理事長を置くことになりました。私は一外科医で癌研究では全くの素人ですが、本学会の発祥の地である大阪に縁の深いものとしてこの大役を仰せつかりました。

日本がん転移学会は1992年に第一回学術集会が開催されます。その前年の日本癌学会の時に末舛恵一先生、小林博先生、鶴尾隆先生、明渡均先生を発起人としてがん転移研究会準備委員会が開催されました。その時に企業にも声をかけて参加してもらうという当時としては斬新なアイデアが採用されました。そして、常任世話人として宝来威先生、渡辺寛先生、明渡均先生をむかえ研究会の開催にこぎつけたということです。本会の永遠のテーマである「転移を制する者は癌を制する」は第一回の研究会の時の末舛先生のあいさつにあったそうです。その後2001年には研究会から学会にかわり第10回日本がん転移学会を曽根三郎先生が開催しております。私は第14回門田守人会長の時の事務局、そして自らが第26回の会長として学会の開催に関わらせていただきました。

さて、現在、日本がん転移学会は多くの課題を抱えていますが、最も大きなものは会員の減少、高齢化です。かつては1,000人を超えた会員も現在は538人まで、減少しています。また、評議員は78名ですが、高齢化が進んでおり、次の理事や会長を選出するのに難渋しています。学術集会は各回の会長のご努力で100題を超える演題を集めていますが、学会員の減少は存続の根幹を揺るがす大きな課題です。この他にも企業会員の減少、財政のひっ迫など前途多難な出発ですが、会員の皆様のお役に立てるように頑張りたいと思います。

ご支援よろしくお願いいたします。

令和5年8月

土岐 祐一郎（大阪大学 消化器外科）

第33回日本がん転移学会学術集会/総会の開催にあたって

会長 吉治 仁志（奈良県立医科大学 消化器・代謝内科）

このたび第33回がん転移学会学術集会総会を2024年（令和6年）6月27日（木）・28日（金）に奈良市の春日野国際フォーラム 麓IRAKAで開催させていただくこととなりました。私は米国留学から帰国した後、医師になってから10年目で本学会へ入会させて頂いた周回遅れのスタート組です。NIH/NCIでは腫瘍における血管新生について研究しており、血管新生の概念を提唱したFidlerの流れをくむ著明な先生方が日本における最先端の研究を行われていることを知り、遅まきながら入会しました。その後、本学会で日本の最先端の血管新生を含めたがん転移研究を勉強させて頂き、基礎と臨床を結ぶ研究のあり方について多くのことを学びました。今回本学会学術集会総会を奈良で初めて開催する機会を与えて頂きました理事の先生方をはじめ関係各位に深く感謝致します。がん転移学会は臨床・基礎の医師のみでなく薬学など他分野の研究者も多く参加されており、臨床医の目とは違った観点のご指摘を受けることができると共に、新しい研究のモチベーションを育ててくれる貴重な学会であると思います。私の専門領域である肝臓でも、血管新生阻害薬と免疫チェックポイント阻害薬の併用がこれまでにない抗腫瘍効果を示し生存期間を大幅に延長することが示され新たなパラダイムシフトが起こっています。一方で、がんの転移制御は未だ解決すべき課題が多く残されており、患者さんの予後改善のため転移機構の解明が喫緊の課題です。

こうした背景のもと、今回のテーマを「がん転移研究の未来予想図」とさせて頂きました。古都奈良から今後の研究の方向性を探り、がん患者さんの予後改善へと繋がる未来へ向けた新しい研究の息吹が感じられる研究会になることを期待しています。開催形式ですが、個人的に学会の目的の1つとして「直接対面で討論を行う」ことは非常に重要な要素であると考えています。コロナの状況にもよりますが、基本的に2023年と同様に現地での開催を予定しています。

会場は野生の鹿（古来から奈良では鹿は神の使者と考えられています）が集まる奈良公園、若草山の麓にあり、先生方には奈良らしく「能舞台」で日頃の成果を発表して頂きます。徒歩圏内に東大寺、興福寺など観光名所も多く薬師寺や唐招提寺も30分以内で移動可能ですので研究会後に古都散策も楽しんで頂ければ幸いです。奈良市へは京都、大阪から近鉄電車でも30分、伊丹空港から空港バスで約50分でお越し頂けます。

なお、今回学会シーズンでもあり2日目が関連学会と重なっています。演題登録時に発表希望日を伺いますので、日本における最初の都であった奈良から新時代における未来へ向けた発信ができるよう多数の演題応募および学術集会への参加を心よりお待ちしております。

会 期 : 2024年6月27日（木）～ 28日（金）
会 場 : 奈良春日野国際フォーラム（奈良公園内）
テーマ : がん転移研究の未来予想図

<https://site.convention.co.jp/jamr2024/>

総会事務局

奈良県立医科大学 消化器・代謝内科

第33回総会運営事務局

日本コンベンションサービス株式会社 神戸支社

e-mail : jamr2024@convention.co.jp

第32回日本がん転移学会学術集会を終えて

第32回日本がん転移学会会長 海野倫明
(東北大学大学院 消化器外科学分野)

2023年7月20日～21日、仙台国際センターにおいて第32回日本がん転移学会学術集会・総会を主催させていただきました。前日の7月19日には集中豪雨があり天候が心配されましたが、7月20～21日両日は、にわか雨はありましたがまずまずの好天に恵まれ、2日間で268名の参加者に会場していただきました。あらためて会員の皆様に厚く御礼申し上げます。

今回の学術集会は、テーマを「転移を制してがんに克つ—Conquer metastasis, conquer cancer—」といたしました。特別講演として、東北大学OBでがん研究会がん研究所所長の野田哲生先生に「あらたな分子標的の同定に向けて」と題する格調高い講演をしていただきました。また教育講演として、がん研究会がんプレジジョン医療研究センターの植田幸嗣先生に「臨床検体を用いた最新のマルチオミクス研究」と題する臨床と基礎を繋ぐわかりやすい講演をしていただき、会員一同の良い学びとなりました。上級演題として、シンポジウム1では日本腹膜播種研究会とのジョイントシンポジウムとして「腹膜播種の制御に向けた新たな診断・治療アプローチ」、シンポジウム2では「転移に対する外科的治療の適応と至適タイミング」、シンポジウム3では「微小転移診断・術後再発予測のup to date」、シンポジウム4ではAMED生命科学・創薬研究支援基盤事業(BINDS)との共催で「がん転移に克つためのバイオ医薬開発技術の最前線」が行われ、熱い議論が盛り上がりました。他の学会や研究会、AMEDの組織等とのジョイントセッションは学会参加者・学会新入会員を増やす可能性があり、今後も続けていきたい、と思いました。その他、会長講演、学会賞受賞講演、4つのランチョンセミナー、1つのイブニングセミナー、9つのワークショップ、ポスター発表、以上を併せて計111題の発表が行われました。多くの若手基礎研究者に会場していただき、相互交流、臨床家との意見交換、研究シーズ探索に役に立ったのではないかと自負しております。また、今回の学術集会の評議員会におきまして、日本がん転移学会の初代理事長として土岐祐一郎先生が選ばれましたことも、大きな出来事でありました。

1日目のポスターディスカッション終了後に会場において全員懇親会が行われ、多数の参加者で盛り上がりました。特別ゲストとして、伊達政宗公、伊達成実公、片倉小十郎景綱公、松尾芭蕉殿、くノ一響殿をお招きいたしました。仙台の武将達と一緒に写真を取ることもできたようで、仙台での学会の良い記念になったのではないかと、思います。

昨年に引き続き本年も日本膵臓学会と開催日が重なり、膵臓関係の研究者の参加が少なかったのは残念でした。7月中旬には日本消化器外科学会もあり、日程は大変厳しいですが、参加者をより増やすためにも他学会との日程調整が重要と反省しております。

このようにして無事、第32回学術集会を無事終えることができましたのも、日本がん転移学会会員の皆様、学会運営を担当していただきましたJCS社の皆様、多くの御助言と御協力をしていただきました東北大学加藤幸成教授・中山啓子教授をはじめプログラム委員会委員の皆様、ランチョンや展示・広告などで学会を支えていただきました多くの企業の皆様、運営のお手伝いをいただきました東北大学総合外科医局員・秘書の皆様、そして事務局長を務めていただきました東北大学総合外科の大塚英郎講師には厚く御礼申し上げます。来年、奈良での第33回学術集会で再会できることを楽しみにしております。

第32回学術集会
若手ポスター賞受賞者
海野会長を囲んで

左からP9-5：押 正徳
P8-3：米田浩人
P7-1：神島泰樹



右からP1-7：本宮綱紀
P3-4：舟橋伸昭
P6-2：河原舞理恵
(敬称略)

第32回日本がん転移学会総会記録

2023年7月20日（木）評議員会（仙台国際センター）で下記報告事項と議案が審議され、さらに同日の総会において報告・承認された。出席者32名、委任状74名

1. 庶務報告

1) 会員状況（2023年7月13日現在）

個人会員：538名 法人会員：2社

名誉会員：20名 功労会員：31名

物故役員（顧問 3名 名誉会員 9名 功労会員 7名）

※2023年1月27日に功労会員の東 市郎 先生がご逝去されました。
心よりご冥福をお祈りしております。

事業報告

1) 学術集会

2022年7月7・8日京都大学百周年時計台記念館で開催の学術集会は新型コロナウイルス感染を鑑み、ハイブリッド開催となりました。

2) 評議員会・総会

新型コロナウイルス感染を鑑み、2022年7月7日評議員会はハイブリッド開催。評議員会の議を経て2021年度収支決算・2022年度予算、第32回副会長吉治仁志選任を審議決定し、総会にて報告しました。
研究奨励賞を1名に授与し、受賞講演は翌日朝一番に学術集会にて行いました。

3) 理事会を3回開催

（2022. 10. 31：WEB、2023. 4. 3：WEB 2023. 7. 19：メトロポリタン仙台）

4) ニュースレターの発行

Vol. 60（2022年9月）、Vol. 61（2023年4月）

2. 会則第4章の改定と役員選任規定第3章の改定が承認された。

改訂に伴い理事長に「土岐祐一郎」先生が選出された。

3. 2022年度収支決算および監査報告書が提出され承認された（次ページ）。

4. 2023年度予算（案）が承認された（次ページ）。

5. 次期副会長に大阪大学保健学科 分子病理の山本浩文先生が選出された。

6. 2023年度役員（会長・理事・監事）が承認された（役員名簿のページ参照）。

7. 片岡 寛章 先生、中山 淳 先生が功労会員に推戴された。

8. 研究奨励賞を1名に授与した。

中山 淳 さん（国立がん研究センター研究所 病態情報学ユニット）

9. 女性研究者がん転移研究グラント賞を1名に授与した。

間石 奈湖 さん（北海道大学大学院歯学研究院 口腔病態学分野血管生物分子病理学教室）

2022年度収支決算

(収入の部)

自 2022年 1月 1日 至 2022年12月31日			
科 目	予 算	決 算	差 異
年会費	(2,790,000)	(3,251,000)	(461,000)
個人会費	2,390,000	2,651,000	261,000
法人会費	400,000	600,000 *	200,000
戻入	0	0	0
雑収入 抄録集ほか	0	0	0
預金利息	(10)	(19)	(9)
普通預金	10	19	9
収入合計	2,790,010	3,251,019	461,009
繰越金	7,760,637	7,760,637	0
総 計	10,550,647	11,011,656	461,009

*: エーザイ株式会社2021, 2022年分

(財産目録)

自 2022年 1月 1日 至 2022年12月31日			
科 目	金 額		
I 資産の部			
流動資産			
普通銀行預金	614,570		
郵便振替口座	321,528		
郵便定額預金	6,000,000		
流動資産合計		6,936,098	
資産合計			6,936,098
II 負債の部			
流動負債			
未払金	0		
流動負債合計		0	
負債合計			0
正味財産			6,936,098

(支出の部)

自 2022年 1月 1日 至 2022年12月31日			
科 目	予 算	決 算	差 異
事業費	(2,200,000)	(2,200,000)	(0)
学会総会補助費	1,500,000	1,500,000※	0
研究推進活動費	500,000	500,000	0
研究奨励賞費	200,000	200,000	0
会議費	(30,000)	(0)	(30,000)
理事会等会議費	30,000	0	30,000
管理費	(2,025,000)	(1,875,558)	(149,442)
印刷製本費	220,000	201,135	18,865
通信運搬費	300,000	248,014	51,986
消耗品費	20,000	39,190	△ 19,190
給与・手当	1,360,000	1,350,330	9,670
旅 費	50,000	4,640	45,360
諸 雑 費	60,000	14,649	45,351
ホームページ費	15,000	17,600	△ 2,600
予備費	(500,000)	(0)	(500,000)
支出合計	4,755,000	4,075,558	679,442
繰越金		6,936,098	
総 計	10,550,647	11,011,656	461,009

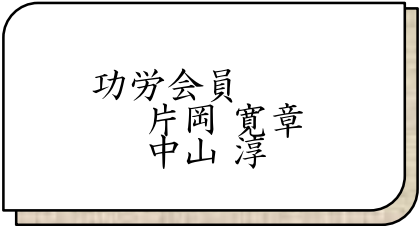
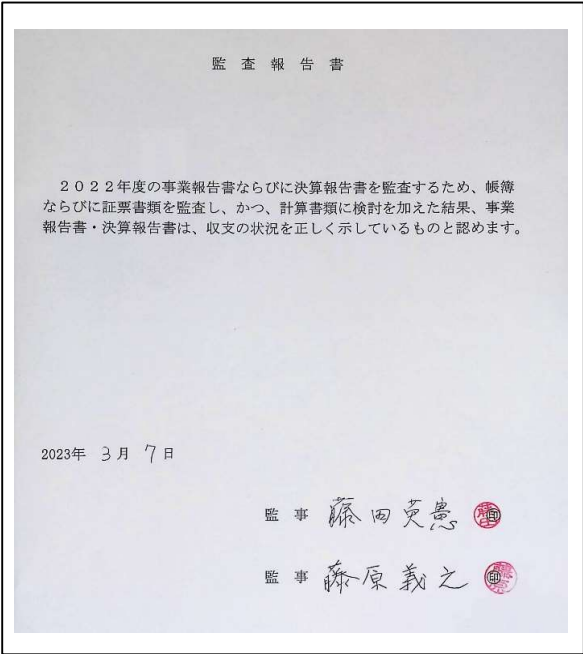
※: 2023年度「第32回日本がん転移学会学術集会(総会)」補助費

2023年度予算

自 2023年 1月 1日 至 2023年12月31日			
科 目	収入予算	科 目	支出予算
年会費	(5,240,000)	事業費	(2,200,000)
個人会費	2,340,000	学会総会補助費※	1,500,000
法人会費	400,000	研究推進活動費	0
寄附金 #	2,500,000	研究奨励賞費	200,000
(50万円*5年分)		女性支援グラント賞	500,000
預金利息	(10)	会議費	(0)
		理事会等会議費	0
		管理費	(1,905,000)
		印刷製本費	200,000
		通信運搬費	250,000
		消耗品費	20,000
		給与・手当	1,350,000
		旅 費	50,000
		諸 雑 費	20,000
		ホームページ費	15,000
		予備費	(500,000)
			500,000
収支合計	5,240,010		5,055,000
繰越金	6,936,098		5,071,108
総 計	12,176,108		10,176,108

※: 2024年度「第33回日本がん転移学会学術集会(総会)」補助費

#: 寄附金は田中紀子功労会員から1年50万円で5年分一括納入に。
使用目的は「女性研究者がん転移研究グラント賞」の賞金とする。



寄稿 1：がん転移の生物学に裏打ちされたこれからの転移研究

名誉会員 入村 達郎（第8回会長、順天堂大学客員教授・東京大学名誉教授）

仙台国際センターで開催された第32回がん転移学会は、海野先生をリーダーとする東北大学の皆様のご尽力で、記憶に残るものになりました。第一回女性研究者がん転移研究グラント賞のプレゼンも素晴らしかった。新入会員の方も数多く迎えたということで、がん転移学会の新たな発展のきっかけになると期待されました。最近は臨床を背景とする方々の参加が見立つようです。転移の克服を目指して転移の生物学に裏打ちされたユニークな研究が、臨床を背景とする方々、基礎を背景とする方々、また最近は少し減ったかと思いますが企業で創薬研究をしている方々の三者によって推進されることを強く願っております。タイトルにさせて頂いた「がん転移の生物学に裏打ち」という言葉が具体的に何を意味するのか、転移の実験的な研究をDr. Isaiah J. Fidlerが開始して50年余が経った今、わかりにくくなっているかもしれないと思い、私見を少し述べさせていただきます。

がん転移の生物学とは、がんが、なぜ(why)、いかに(how)、いつ(when)、どこに(where)転移するのか、少なくともこれらの一つを科学的に明らかにしようとする学問を指すのだと思います。転移モデルを用いた研究、in vitroや分子レベルの研究、臨床病理的な情報に基づく研究のいずれもが該当し、それらの研究の成果は転移の予防、診断、治療に役立つことが期待されます。

がんが「なぜ転移するのか」という生物学的な問いに対する答えは、実は存在しないのかも知れません。がん細胞が、「広がって増える」という生物の持つ一般的な性質を受け継いでいるためなのでしょう。あらゆるがんは転移する可能性を持つ。見かけ上転移しないがんがありますが、転移する前にホストの個体を殺してしまうので、そのように見えるだけなのだと思います。本来は他の細胞と調和しながら増殖分化する多細胞生物の細胞が、なぜ利己的に、細胞レベルで「生物の持つ一般的な性質」を発揮するようになってしまうのかという問いかけは、転移の生物学の根幹であり、若い基礎研究者のチャレンジに期待したいところです。

がんが「いかに転移するのか」は、この50年間で最も研究の進んだ領域でしょう。Dr. FidlerやDr. Garth L. Nicolsonによるがん細胞が血管内に侵入し、遠隔部位に運ばれ、組織内に侵入して増殖して腫瘍を形成するといういわゆる転移のプロセスの理解が横糸となり、縦糸としては、分子の相互作用というレベル（MMPなどによるマトリクスの分解など）、細胞生理学というレベル（シグナル伝達による細胞挙動の変化）、細胞の分化というレベル（EMTやエピジェネティックスの揺らぎに伴い複数の遺伝子発現が制御されるなど）それぞれでの、転移性に大きく影響するイベントの関わりがわかってきて、転移の生物学的な理解は大きく進みました。重要なのはこれらの転移に関わるがん細胞の性質は、発がんというイベントに関わる遺伝子の変化とは直接関係していない、という点が明確になって来ていることかと思われます。一方免疫系などホスト側の因子は、発がんから転移形成に至るまで常に大きく関わり続けるようです。

がんが「いつ転移するのか」が、臨床的に極めて重要な問題提起なのは、その答えによって治療法を見直す必要があるからです。一方生物学的には、いかに転移するかに関わる「転移のプロセス」が、どこまでが進みやすく、どこから先が達成されにくいかにによっていつ転移するかが決まります。これはがんの種類によって異なり、また同じがんでも個々の患者でまちまちであると思われます。例えば乳がんでは、原発巣からの播種は早期に起こるが、5年10年という長い休眠期を経て転移が形成することもあるようです。休眠からの目覚めに際して、臓器環境との相互作用の結果として、がん幹細胞の増殖シグナルの活性化とか、EMTとかが起こっているのでしょう。このようながんの場合、何が引き金なのかを是非解明したいところです。

がんが「どこに転移するのか」は、1889年に発表されたStephen Pagetの種と土の仮説が提起した問題であり、これに対する一般的かつ包括的な答えは130年以上経た現在でも得られていないと言って良いと思います。将来転移が形成される臓器の血管がプレコンディショニング

（苗床の土作り）されるという知見が得られ注目されていますが、残念ながら、転移の臓器特異性（循環系の繋がりからは説明出来ない転移の特性）を説明するに至っていません。

がん転移生物学の研究の過去を振り返ると、時代時代によって、トレンドがあり、あたかもそのサブジェクトの周辺が最先端であるかのように国際的にも錯覚されてきたように思われます。細胞外マトリクス分解の時代、細胞移動と接着の時代、TGF-betaシグナルの時代、ゲノムデータの時代などを経て今があります。臨床的に見えているがん転移に関わる諸現象を転移の生物学という視点から捉え直すことが、これからの転移研究に大きな発展をもたらす、国際的にもインパクトの強い貢献ができると確信しております。

本稿をまとめるにあたり、MDアンダーソンがんセンター在職中以来40年余日本がん転移学会などでおつきあいいただいている浜田淳一北海道医療大学教授にご助言をいただきました。感謝申し上げます。

寄稿2：第27回日本がん転移学会研究奨励賞を受賞して

受賞課題：1 細胞解析による乳がん多様性とがん進展機構の解明

中山 淳（国立がん研究センター研究所 病態情報学ユニット）

この度、第27回日本がん転移学会研究奨励賞を頂戴し、第32回日本がん転移学会学術集会・総会にて研究奨励賞受賞講演の機会をいただきました。栄誉ある賞をいただきましたことを、大会長の海野倫明先生をはじめ、選考委員の先生方、学会関係者の皆様に感謝申し上げます。また、本奨励賞に推薦いただきました山形大学 二口充先生、大学・大学院生時代からご指導いただきました早稲田大学 仙波憲太郎先生、現在ご指導いただいております国立がん研究センター研究所 山本雄介先生に感謝申し上げます。私が日本がん転移学会に初めて参加したのは、2017年に大阪で開催された第26回学術集会・総会でした。当時、早稲田大学の大学院生であり、独自に樹立した乳がん高転移株についてポスター発表したことを今でも鮮明に覚えております。この年以降は毎年参加し、研究成果を発表させていただきました。こんなにも早く奨励賞をいただきましたこと、身が引き締まる思いです。



左）中山 淳 さん （右）海野倫明会長

今回の研究奨励賞講演では、非浸潤性乳管がんのsingle-cell RNA-seq (scRNA-seq) 解析について発表させていただきました。非浸潤性である早期の乳管がん（Ductal Carcinoma in situ :DCIS）と浸潤性乳管

がん (Invasive Ductal Carcinoma: IDC) の臨床検体を国立がん研究センター中央病院からいただき、scRNA-seq解析を行いました。DCISはステージ0とも呼ばれる早期の乳がんですが、EMT関連遺伝子やMMPファミリー遺伝子をすでに発現しており、IDCとほぼ同等の浸潤関連遺伝子の発現を示すことがわかりました。他にも免疫細胞との相互作用解析などを通して、DCISとIDCは同等の悪性度であることが明らかとなりました。さらに、独自に開発した細胞集団不均一性を定量化する手法VARIED解析を行った結果、DCISの時点で積極的なクローン拡大が起きており、IDCよりも多様なクローンが存在することを示すことができました。DCISは非浸潤性であるにも関わらず、遠隔臓器への転移を示す (Early dissemination) 症例が存在します。私たちの解析結果は、DCISの段階で悪性度が高く、early disseminationを起こすことを支持する結果でありました。浸潤を起こすよりも前にクローン拡大を起こして多様な性質を獲得することは、転移を理解する上でも重要な現象だと考えられます。また、すい臓がんにおいても同じような解析結果が、2023年6月にCancer Discovery誌に報告されております。実は「がん細胞の進化」というのは早期に完成してしまっているのかもしれませんが、では、「何が浸潤・転移を規定しているのだろうか。」まだまだ謎が多く、解決すべき課題が残っているとされた分野だと改めて実感しているところであります。

私はベクター作製などのDNAワーク、in vitroの生化学実験や細胞培養、動物実験に加えて、網羅的遺伝子発現解析を中心としたBioinformaticsまで、WETとDRY両方の技術を駆使して転移研究に励んでまいりました。様々な技術を使うからこそ、実際に実験してみないとわからないこと、PCで膨大な情報を処理してみないとわからないことがあることに気づきました。今回の発表内容は、WET実験では実証することが難しい、DRY解析だからこそ導き出した結論でありました。がん転移学会に毎年参加しておりますが、まだまだDRY解析を積極的に取り入れている演題は少ないな、という印象を受けています。WETとDRYの両方ができるからこそ、学会に貢献できることもあって考えております。

最後に私事でございますが、2023年9月より日本がん転移学会事務局がある大阪国際がんセンター（旧称：大阪府立成人病センター）研究所の腫瘍増殖制御学部に研究員として着任することになりました。愛媛大学の東山繁樹先生が腫瘍増殖制御学部部長を兼任されており、腫瘍増殖と血管に焦点を当てた研究を中心に、研究員それぞれが独自にユニークな研究を展開しております。皆様もご存知のとおり、血管との相互作用は転移にとって欠かせないイベントの1つです。新たな視点を自身の研究に取り入れて、さらに転移研究を進めていきたいと思っております。

ご指導いただきました仙波憲太郎先生と二口充先生は大阪のご出身であり、大阪国際がんセンターは仙波憲太郎先生の指導教員である本学会物故功労会員 豊島久真男先生が総長を務められた研究機関でもあります。他にも様々なご縁を感じながら、今大阪の地におります。これからも大阪で転移研究を進め、日本がん転移学会の活性化と発展に貢献できるよう邁進してまいりますので、ご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

寄稿3：第1回日本がん転移学会女性研究者がん転移研究グラント賞受賞 受賞課題：がん細胞－血管内皮細胞Cluster形成によるがん悪性化促進

間石 奈湖（北海道大学大学院歯学研究院 血管生物分子病理学）

このたびは第32回日本がん転移学会学術集会・総会において、第1回日本がん転移学会女性研究者がん転移研究グラント賞をいただき、大変光栄に存じます。会長の海野倫明先生、選考



左から海野倫明会長、間石奈湖さん、田中紀子功労会員

委員の先生方、ご推薦をいただきました樋田京子先生をはじめ、学会関係者の先生方に深く御礼を申し上げます。本賞は日本がん転移学会功労会員の田中紀子先生より寄贈され、がん転移研究の将来の担い手を目指す女性研究者のキャリアアップを支援することを目的とされています。女性研究者の育成・活躍を応援して下さる先生の思いを心強く感じますと共に、身の引き締まる思いです。がん研究者の女性比率は以前よりも上がってきていると感じますが、がん転移研究をされている女性研究者はそれほど多くないように思います。

す。選出された意義を十分認識し、研究成果をあげるべく、より一層研究に邁進したいと思っております。

私は大学院生の時から、樋田京子先生が主宰する研究室にて腫瘍血管研究を行ってきました。腫瘍血管を裏打ちする腫瘍血管内皮細胞には様々な異常性があることがわかってきております。私は特に高転移性腫瘍内の血管内皮細胞の性質に着目し、がん転移との関係について検討してきました。高転移性腫瘍由来血管内皮細胞はbiglycanという糖タンパクを多く分泌すること、biglycanががん細胞の血管内侵入ならびに遠隔転移を促進することを以前に見出しています。この研究成果により2019年にがん転移学会研究奨励賞を受賞させていただきました。今回はさらに、高転移性腫瘍由来血管内皮細胞の高い接着能やスフェロイド形成能に着目しました。近年ではがん細胞は単一のCirculating tumor cell (CTC) のみならず、がん細胞同士や血小板、間質細胞などと細胞塊Clusterを形成して血液中を循環し、遠隔臓器へと転移することが知られています。私達も病理医として、がん組織内の血管腔内に、血管内皮細胞で被覆されたがん細胞Clusterが存在することを観察してきました。そこで、これまで見出してきた腫瘍血管内皮細胞の性質を踏まえ、がん細胞－血管内皮細胞Clusterががんの転移促進に関与しているのではないかと着想しました。

実際にがん患者さんの血液中にがん細胞－血管内皮細胞Clusterが存在するかどうか、共同研究者とClusterを分離するためのデバイスを開発し取り組んできました。その結果、がん患者末梢血中にがん細胞－血管内皮細胞Clusterが存在することが明らかになりました。また、自分たちで分離・培養した初代培養腫瘍血管内皮細胞を用いて、in vitroでがん細胞－血管内皮細胞Clusterを作製することに成功し、さらにそれらを用いてin vitroおよびin vivoにおいて様々な研究手法で、がん細胞－血管内皮細胞Clusterのがん転移への関与について検討を進めています。今後、がん細胞－血管内皮細胞Clusterの臨床的意義や再発転移に関わる分子機構を明らかにし、新規転移診断法や治療法の開発につなげたいと思っております。

私はこれまで本学会において、筆頭演者として研究の進捗を9回発表させていただいております。多くの先生方とディスカッションさせていただき、貴重なご意見を頂戴してきました。今回の受賞を励みに、本研究プロジェクトを基礎的研究から臨床応用に至るまで様々なアプローチ方法で発展させ、がん転移制御に取り組んでまいりたいと思います。今回、多くの先生方に祝福と激励のお言葉をかけていただき、大変嬉しく思いました。今後も本学会員の先生方のご指導ご鞭撻を賜り、研鑽を積んでいきたいと思っております。

日本がん転移学会研究奨励賞

<http://jamr.umin.ac.jp/research/index.html>

本賞はすぐれた研究業績を発表した本学会会員若干名に対して、
選考の上、本学会学術集会において授与する

- ・受賞候補業績の範囲は、原則として本学会において発表された業績として、
本学会会員により応募されたものとする。
- ・受賞候補業績は、将来の発展が期待される若手研究者(応募年度の4月1日現在
43歳以下)によるものとする。
- ・研究奨励賞受賞者数は単年度2名程度を原則とする。
- ・研究奨励賞の賞金(奨励研究費)は1件20万円とする。

日本がん転移学会女性研究者がん転移研究グラント賞

<http://jamr.umin.ac.jp/research/05.html>

本賞はがん転移研究の将来の担い手を目指す女性研究者の
キャリアアップを支援することを目的とする。

本賞は日本がん転移学会田中紀子功労会員より寄贈され、
賞状ならびに賞金(研究費)をもってこれにあてる。

- ・応募時点で日本がん転移学会会員であり、助成対象期間中も会員であること
- ・助成対象期間中にがん転移研究に従事する女性研究者であること
- ・女性研究者がん転移研究グラント賞受賞者数は毎年1名程度を原則とする
- ・女性研究者がん転移研究グラント賞の賞金は合計50万円までとする

両賞の募集期間：毎年 4月1日～9月30日

募集要項・申請書等については、事務局までメールでお問い合わせください

◆事務局◆ E-mail: jamr2021-office@umin.ac.jp

新評議員の申請案内

評議員の任期は3年ですが、第32回理事会・評議員会で随時評議員に選任できることが承認されましたのでお知らせします。

個人評議員の選出条件

- 1) 原則として3年以上本学会会員であり、会費を完納していること。
- 2) 本会や関連学会、学術雑誌などですぐれた評価を受けていること。
*筆頭あるいは共著の発表を、3回の総会で少なくとも1回行うことを原則とする。
*役員の任期は65歳になる年の12月末で終了する。

★ 評議員の年会費は10,000円です。

日本がん転移学会会則

第1章 会の名称

第1条 本会を「日本がん転移学会」 “The Japanese Association for Metastasis Research” と称する。

第2章 目的および事業

第2条 本会は、がん転移による死亡率を減少せしめるべく、基礎、臨床、開発（薬剤、機器等）研究を通じて実質的討議を行い、がん転移研究の発展、診断・治療の進歩普及に貢献する事を目的とする。

第3条 本会は、前条の目的達成のため、次の事業を行う。

- (1) 学術集会を少なくとも年に1回開催
- (2) がん転移に関する研究発表、情報交換、資料の収集、教育及び研修
- (3) 本分野に関して海外研究者との連携
- (4) その他本会の目的達成に必要な事業

第4条 本会の事務局は、大阪市中央区大手前3丁目1番69号 大阪国際がんセンター・研究所内に置く。

第3章 会 員

第5条 会員は、本会の趣旨に賛同し、評議員、顧問あるいは名誉会員の推薦を受け、理事会の承認を得て入会した個人ならびに法人（法人格のない団体を含む）とする。

第6条 会員である法人の取扱いには次による。

1. 法人に所属する個人はその法人の承認を得れば本会の事業に参加できる。
2. 前項により参加する個人からは年会費を徴収しない。
3. 会員である法人は登録者3名迄と会計事務担当者1名（兼任も可）を決め事務局に届出なければならない。

第7条 会員は評議員会において別に定める会費を納入しなければならない。

第8条 引きつづき2年以上会費を滞納したものは評議員会の議により、その資格を喪失する。

第9条 顧問は理事会にて推薦、評議員会にて承認を受ける。また、本会に対して特に功労のあった者は、名誉会員・功労会員として理事会にて推薦、評議員会にて承認を受ける。顧問・名誉会員・功労会員は本会の発展のために適切な助言をする。顧問・名誉会員・功労会員は会費を要しない。

第4章 役員および役員会

第10条 本会に理事長、会長1名、副会長1名、若干名の理事ならびに評議員、監事2名、事務局幹事を置く。

＊事務局幹事は会長が任命し、会長及び理事会の事務を補佐する。

第11条 理事長は本会を統括し、理事会・評議員会では議長となる。副会長は、次期会長がこれを務め、会長を補佐し会長に事故のある場合はその職務を代行する。会長・副会長の任期は1年とする。

第12条 理事長は理事会で選出（推薦）、評議員会で承認を得る。理事長の任期は2年2期までとし、役員の定年（65歳）を超えた場合も任期完了まではその職務を継続することとする。

理事は評議員会にて、評議員の中から選任される。任期は3年とし、任期終了後1年間は再選されない。理事は会長を補佐し日常の会務について決定し、執行する。理事会の構成は、会長・副会長・理事および前会長とする。理事会は構成員の2/3以上の出席（但し委任状を提出した人は出席とみなす）により成立し、議決は出席者の過半数をもって決する。

理事長は学会の運営・方向性を考え、会長・理事と共に理事会を運営していく。理事長に事故がある場合は理事会で代理の理事長を選出し、その職務を代行する。

第13条 評議員は会員の中から選出される。評議員の任期は3年とし、再任は妨げない。評議員会は会の運営に関する重要事項を審議決定する。評議員会は評議員の1/2以上の出席（但し委任状を提出した人は出席とみなす）をもって成立し、議決は出席者の過半数をもって決し、可否同数のときは議長の決するところによる。

第14条 監事は評議員の中から選出される。監事の任期は1年とし、再任は妨げない。監事は本会の会計および会務を監査し、理事会・評議員会にて報告する。

第15条 理事長・次期会長・理事・評議員・監事の選出は日本がん転移学会役員選任規程に基づく。

第5章 総会および学術集会

第16条 総会は毎年1回学術集会の時期に会長が招集し、総会の議長となって次の議事を行う。

1. 会務の報告
2. 会長が必要と認める事項

総会の議事は出席者の過半数によって決する。可否同数のときは議長の決するところによる。

第17条 会長が必要と認めたときは評議員会の議を経て、臨時総会を随時開催することができる。臨時総会の議案は定期総会に準ずるものとする。

第18条 学術集会は毎年1回会長が主宰し、研究発表、意見交換を行う。

第19条 本会会則第2章第3条の4の規定に基づき各種の委員会を設けることができる。委員会の設置、その構成及び運営方法は、理事会において討議し、評議委員会にて承認する。また会の目的を達成するための具体的、実質的討議を行うため、研究推進会議(班)を設置することができる。その構成及び運営方法は理事会において討議し、評議委員会にて承認する。研究推進活動の経過については、学術集会で報告する。

第6章 会計

第20条 本会の経費は会員が拠出する会費ならびに協賛金等をもってこれにあてる。

第21条 毎年度収支決算は会長が作成し、監事の監査を受け、評議員会の承認を得て、毎年総会において報告する。

第22条 会計年度は毎年1月1日に始まり12月31日に終わる。

第7章 会則の変更

第23条 本会会則の変更は理事会、評議員会および総会において、各々出席構成員の2/3以上の承認を得なければならない。付則

本会則は平成12年7月1日よりこれを実施する。本会則は平成14年6月8日一部改正した。本会則は平成18年9月3日一部改正した。平成29年3月25日 大阪府立成人病センターの移転及び名称変更に伴い第2章4条を変更する。

本会則は令和元年(2019年)7月25日一部改正した。本会則は令和5年(2023年)7月20日「第4章」を一部改正した。

日本がん転移学会役員選任規程

第1章 役員の選任

第1条 会則第15条により次期会長(副会長)・理事・評議員および監事は本規定に基づき選出される。なお、役員は65歳をもって定年とする。

第2章 次期会長(副会長)の選出方法

第2条 次期会長の選出に際しては、評議員全員に告示する。候補者は所定の様式で抱負を述べた資料を理事会に提出し、理事会はこれを討議し候補者1名を推薦する。

第3条 次期会長の選出は評議員会で行う。

第3章 理事長の選出

第4条 理事長は理事経験者の中から広く求め、理事会で選出(推薦)する。理事長は必要に応じて理事会を招集することが出来る。

第4章 理事の定数と選出方法

第5条 理事の定数は個人評議員より約6名(原則として基礎3名、臨床3名)、法人評議員より1名、および理事長とする。

第6条 理事長以外の理事は会則第12条により評議員の中から選出される。

第7条 個人会員理事は評議員の選挙により選出される。候補者は所定の様式で抱負を述べた資料を評議員会に提出する。

第8条 法人会員理事は理事の選挙により選出される。

第5章 評議員の選出方法

第9条 評議員は会則第13条により会員の中から選出される。

第10条 評議員の選出は理事会で行う。

第11条 個人評議員は、一定の条件(細則に定める)を満たす者とする。

第12条 個人評議員の候補者は所定の様式による資料を本会事務局に届け出ること。

第13条 法人会員評議員は理事会で選出する。

第6章 監事の選出方法

第14条 監事は会則第14条により評議員の中から選出される。

第15条 監事の選出は理事会で行う。

- 付則
1. 理事選挙の施行は次期評議員が選出された(平成15年度)以降とする。
 2. 本役員選任規程は平成14年6月8日よりこれを実施する。本役員選任規程は平成15年6月29日一部改正。
 3. 本規程の変更は理事会および評議員会において、各々出席構成員の2/3以上の承認を得なければならない。
 4. 役員の任期は、65歳になる年の12月末で終了する。

日本がん転移学会役員選任規程細則

1. 個人会員理事の選出方法

- 1) 投票は原則として郵送とする。
- 2) 評議員は基礎系候補・臨床系候補に各1票投票する。

2. 個人評議員の選出条件

- 1) 原則として3年以上本会会員であり、会費を完納していること。
- 2) 本会や関連学会、学術雑誌などですぐれた評価を受けていること。

3. 評議員の資格

- 1) 筆頭あるいは共著の発表を、3回の総会で少なくとも1回行うことを原則とする。

日本がん転移学会役員

理事長：	土岐 祐一郎			
会長：	吉治 仁志 (33回)			
副会長：	山本 浩文			
前会長：	海野 倫明			
理事：	瀧口 修司	早川 芳弘	福島 剛	二口 充
	溝上 敦	山本 浩文	大鵬薬品工業(株)	
監事：	井上 正宏	エーザイ(株)		
評議員：	足立 靖	有明 恭平	石井 秀始	泉 浩二
	板野 直樹	伊藤 和幸	稲田 全規	猪原 秀典
	上原 久典	大島 正伸	大塚 英郎	岡田 太
	沖 英次	尾崎 充彦	掛地 吉弘	加藤 靖正
	加藤 幸成	川田 学	神田 光郎	北川 透
	北川 雄光	北台 靖彦	北山 丈二	国安 弘基
	隈元 謙介	五井 孝憲	小泉 桂一	越川 直彦
	粕 雄一郎	堺 隆一	坂本 修一	坂本 毅治
	清水 史郎	下田 将之	園下 将大	高野 重紹
	瀧口 修司	滝野 隆久	竹内 裕也	竹田 和由
	谷口 博昭	土岐 祐一郎	中 紀文	永野 浩昭
	西岡 安彦	浜田 淳一	東 伸昭	福島 剛
	藤田 直也	藤原 俊義	藤原 義之	樋田 京子
	星野 大輔	松尾 洋一	三森 功士	望月 早月
	八代 正和	安田 卓司	安本 和生	矢野 聖二
	山口 英樹	山本 博幸	山本 真義	由井 理洋
	横崎 宏	横山 省三	渡 公佑	
(アイウエオ順)				
事務局幹事：	大植 雅之			
評議員任期：2022年7月22日～2024年/第33回総会まで(第31-33回) 評議員年会費：10,000円				

日本がん転移学会 名誉会員・功労会員

名誉会員：	愛甲 孝	入村 達郎	太田 哲生	高後 裕
	小林 博	今野 弘之	済木 育夫	佐藤 博
	清水 英次	清木 元治	曾根 三郎	谷口 俊一郎
	田原 榮一	夏越 祥次	新津 洋司郎	宮坂 昌之
	門田 守人	安井 弥	横田 淳	渡辺 寛
功労会員：	伊藤 壽記	伊東 文生	岡田 保典	小野 真弓
	垣添 忠生	片岡 寛章	神奈木 怜児	久保田 俊一郎
	桑野 信彦	小林 浩	佐治 重豊	清水 暁
	高橋 俊雄	竹之下 誠一	竜田 正晴	田中 紀子
	茶山 一彰	寺田 雅昭	中津川 重一	中森 正二
	中山 淳	西村 行生	宝来 威	細川 真澄男
	松浦 成昭	宮城 妙子	宮崎 香	向田 直史
	武藤 徹一郎	森 正樹	矢野 雅彦	矢守 隆夫
	渡邊 昌彦			

日本がん転移学会 物故役員

物故顧問：	菅野 晴夫	杉村 隆	明渡 均	
物故名誉会員：	佐藤 春郎	末舛 恵一	田中 健蔵	塚越 茂
	鶴尾 隆	螺良 英郎	中村 久也	磨伊 正義
	Isaiah J. Fidler			
物故功労会員：	東 市郎	阿部 薫	尾形 悦郎	北島 政樹
	久保田 哲朗	豊島 久真男	馬場 正三	

日本がん転移学会事務局 宛
Fax : 06-6945-0355

日本がん転移学会連絡用紙

日本がん転移学会会員の種々の変更・退会等の連絡はこの用紙をご利用ください。
会員番号(郵便物の宛名ラベルに印刷してある貴氏名の右下の数字)、並びにご氏名(フリガナ)を明記の上、
変更したい事項をご記入いただき、封書またはFax、E-mailにてご連絡ください。

年 月 日

住所等変更 ・ 退会 届

(上記、どちらかを○で囲んでください)

(フリガナ)		会員番号	
氏 名		生年月日	
勤 務 先	勤務先名称(部所属も記入してください)		
	〒		
	Tel		Fax
	E-mail		
自 宅	〒		
	Tel		Fax
	E-mail		
	雑誌等送付先を○で囲んでください。 勤務先 ・ 自宅		
変更年月日 西暦 年 月 日 付で変更します			
退 会 届 西暦 年 月 日 付でもって退会します			
その他			

※個人情報について

会員への連絡、会誌等の発送等、学会活動の目的に限定して利用します。

=====

[発行・編集]
日本がん転移学会事務局
Tel/Fax 06-6945-0355 (直通)
E-mail : jamr2021-office@umin.ac.jp
〒541-8567
大阪府中央区大手前3丁目1番69号
大阪国際がんセンター・研究所内

=====

2023.9